



私はこのお屋敷に子供の家庭教師として通っている。お屋敷の表の門は重要なお客だけが通るもので、使用人にすぎない私は横手の通用門を歩いて中に入る。勝手口で彼女が出迎えてくれて、私に告げた。

「先生、申し訳ありません、文彦さんは三十分ほど遅れるそうです」

「真理（まり）さんが謝ることじゃありません」

彼女のためらいなくまっすぐなまなざしに、私は目を合わせることができない。いつも目を伏せてばかりの陰気な家庭教師を彼女はどう思っているだろう、と不安にかられる、意味もなく。彼女はなにも思ったりしない。

時代劇に使いそうな庭の見える廊下を歩いて、いつもの部屋に案内される。そこには座卓と座布団が置いてあるほかはなにもない。気を散らさないように余計なものを置かない、勉強専用の部屋なのだという。私は座布団のひとつに座る。

「お茶をお持ちします」

彼女はすぐに戻ってきて、急須からお茶を注いでくれる。

紬の袖から覗く手首を、見つめてしまう。アイスクリームのような襟足に、化粧っ気のない横顔。彼女の肌には吹き出物ひとつ見たことがない。彼女は夜ふかしすることも、食べ過ぎることもない。彼女の辞書には「つつい」という言葉はない。

その横顔が、ほころぶ。

「そんなに見つめないでください、穴が開いてしまいます」

目をそらす。

「そんなこと、してません」

「嘘つきは嫌いです」

私は困惑する。彼女は どうしてこんなことを？ 三十分ほど間を持たせるために？ まさか。私の態度にトラブルの予兆を読み取った？ そうかもしれない。

彼女は微笑んでいる。彼女は作り笑いはしない。彼女は嬉しいときにはではなく、必要なときに笑う。

「じゃあ嫌いになってください」

「ということは、灯（あかり）さんは嘘つきなんですね？」

彼女が私を下の名前で呼んだのは、これが初めてだった。私はますます困惑して身構え、黙る。

「嘘つきの灯さんが『嫌いになってください』って言ったら、それは嘘なんですから、『好きになってください』が本当なんじゃない？」

「それは……」

彼女は指先で、私の右手の人差し指の爪を、ちよんとつついた。

「おはようございます。ただいま朝の六時半になりました」――目覚まし時計の声。

起こされる前から目は覚めていた。布団の中で、思い描いていた。架空のお屋敷、架空の彼女

眠りの中で見る夢は、筋が通らないのが当たり前だけれど、こうして思い描く夢は、でたらめ

だと醒めてしまう。

彼女がいるのは普通は大金持ちの家だから、お屋敷が舞台になる。なんの用もなく他人の家に行ったりはしないから、私は家庭教師ということにする。家庭教師と彼女が挨拶以上の言葉を交すには、ちょっとしたきっかけが必要だから、生徒が遅刻する。

こうやって筋を通して、もっともらしくして、夢が醒めないようにする。

現実と合わないところは、どうしても残る。たとえば、家庭教師ごときが彼女に会えるのはおかしい。けれど、そこは設定をいじってしまう。現実とは少し違っていても、夢の中で辻褄が合っていれば、気にならない。

今朝の夢はなかなかの出来栄で、もっと見ていたかったけれど、時間切れだった。私は起きて台所に立ち、二人分の朝食を作り始める。

「おはよ〜」

衣紅（いく）が起きてきた。

「おはようございます」

「この匂いは――えっと、あれ、ホットケーキ！」

ピラミッドかストーンヘンジの謎が解けた、とでもいうくらいに大げさに身をよじらせながら、衣紅は台所に現れた。

「はい」

「カスタードクリームは？ どこ？」

「ありません」

「え〜え〜え〜やだやだやだ、ホットケーキにはカスタードクリームがなきゃやだ〜」

「衣紅」

「やだったらや〜だ〜」

「いい子にしてたら、これをあげます」

私は冷蔵庫を開けて、ホイップクリームのスプレー缶を出して衣紅に見せた。

「なにこれ…… プシュってやるとホイップクリームが出るの？ 新発明？」

「私が子供のときからあります」

「私が子供のときにはなかったと思うな〜」

衣紅は手のひらにホイップクリームを出して舐め始める。

「お菓子作りでもしてたんですか？」

「お菓子を作るときって、小麦粉をふるいにかけるんでしょ？ それは知ってる。そこで挫折したから」

「そこまではやったんですか。偉いですね」

「ううん、やったんじゃないくて、話を聞いただけ。そこまで聞いて、あー無理って思って、挫折」

「なにが無理なんだか、さっぱりわかりません」

「面倒くさくて耐えられない。もっとガーッとやれないの？ ガーッと」

「もし衣紅の職場で、新人がそういうこと言ったら、どう思いますか？」

「私パティシエじゃないもん」

ホットケーキとグレープフルーツだけの朝食を済ませると、衣紅は着替えて仕事に出かける。私は玄関でキスをして見送る。

台所の片付けを終えたとき、ふと今日の時間割が不安になり、軽く右手を挙げて秘書を呼ぶ。

「はい」

「大学——」

「二限からです」

秘書はどんどん出来がよくなる。昔は、携帯に向かってしゃべらないと出てこなかったのに、今はほんのちょっとした仕草で「はい」と返事がくる。昔の秘書はいらないことを長々と説明した。たとえばさっきの返事なら「二限に機能性材料、三限にトライボロジー……」という風だった。今は、こちらの知りたいことを薄気味悪いくらい鋭く察するようになり、余計なことはほとんど言わなくなった。そのうち、知りたいと思うより先に知らせてくれるようになるかもしれない。

「面接——」

「明日の午後一時に市ヶ谷です」

やはり最初に思ったとおり、今朝はゆっくりしてられる。居間で紙を広げて、表示履歴をたぐると、すぐに見つかった。

『ヒューマン・アクティビティの明日を拓く HAパラダイムブログ』

『近くて遠い、遠くて近い、完全人型』

『第一回 完全人型って昔そんなのあったよね』

HAパラダイムブログ読者の皆様はじめまして、わたくし清水衣紅です。今日からHAパラダイムブログ執筆陣の一員となり、このブログを書かせていただくことになりました。

はじめましてということで少しだけ自己紹介をいたしますと、わたくしは介護用人型を扱う商社で運用監視サービスのリセールを担当しております。

が、このブログの内容はわたくしの本業とは一切無関係。タイトルにありますとおり、完全人型のことを書かせていただきます。

衣紅は昨夜遅くまで、このブログの記事を書いていた。

「完全人型って、フィギュアスケートを滑ってた、あれ？」

はい。世界初の完全人型は松芝ヒューマンアクティビティ（松芝HA）が二〇七三年に発表した「真理（まり）」です。スケートリンクの上で華麗にジャンプやスピンを滑る映像は大変印象的で、当時の報道ではいつもこの映像が使われていました。

ちなみにですが、あの撮影に使われたのは「真理」の第一号体です。彼女は現在、松芝ヒューマンリレーションシップ（松芝HR。二〇七九年に松芝HAから分社化しました）のショールームで受付をしています。

「あのときはすごく話題になったけど、その後はぜんぜん聞かない」

はい。完全人型のことがマスコミに大きく出たのはあのときだけです。でもこの場合、「便りがないのはよい便り」なのです。

完全人型というのは一般向けの宣伝をしない業界です。広告も打たないし、展示会のようなイベントも開きません。たくさんの人に興味を持ってもらいたいとは全然思っていません。たくさんの人、すなわち普通の人、すなわち貧乏人だから、というのも理由のひとつです。自家用ジェット機のテレビCMがないのと同じことですね。が、それよりもなによりも、実物の魅力が圧倒的！ なのです。

完全人型にいったん会えば、必ず欲しくなります。このすごさはどんなメディアでもけっして伝えられません。お金持ちはお金持ち同士で付き合っているのです、わたくしのようなしがない月給取りとは違って、完全人型を連れている人に会う機会がたくさんあるのです。きっと

マスコミでの宣伝をしないので、もしマスコミで話題になるとしたら、おそらくはたいいてい事件事故などのネガティブなニュースです。読者の皆様は、完全人型についてのネガティブな事件事故をなにかご記憶でしょうか？ 細かい事件はゼロではないものの、テレビ地上波で報道されたことは一度もないと思います。総フィールド運用歴はまだ約四〇〇〇体年にすぎませんが、初期不良が少ないとは言えると思います。

衣紅は嘘はついていないけれど、正直でもない。

HA業界の人は、完全人型のことを話したがる。引越し作業用の足が履物を出し入れする仕組みの話にはみんな目を輝かせるのに、完全人型のことが話題になると、後ろめたそうに口を重くする。

真理がマスコミにもてはやされていたときには、完全人型はその名のとおり、究極の人型、HAの頂点だった。それが今では――

「大金持ち向けに細々とやってるの？」

総務省の発表によりますと、今年三月末の時点でフィールド運用中の完全人型は七五五体。関係者が大金持ち以外の人が見かけることはめったにないと思います。たとえ見かけても、関係者以外の人には見分けられません。

完全人型のフィールド運用コストは、介護用のおよそ二〇倍になります。総務省の統計では、HA市場全体に占める完全人型の割合は二%弱。HAパラダイムブログ読者の皆様のなかにも、完全人型に携わっておられるかたがいらっしゃるのではないのでしょうか？

「ぶっちゃけ愛人の代わりでしょ？」

読者の皆様が一番気になっていらっしゃるかもしれないこの質問については、次回をお楽しみに！

私は紙を広げたまま、子供のころの思い出にふけた。

ニュース映像のなかで真理が滑っていたのは、スタンドスピン、イーグル、ダブルルッツ。

トップ選手に比べれば、真理のスケートはのどかで弱々しかった。けれど、氷を押し加速するときの伸びは、魔法だった。氷を押しす力の何倍もの力で押し返されているかのように見えた。

スタンドスピン。あまり印象がない。映像ではスピンの入りがカットされていて、回っている最中しか見られなかった。

イーグルの入りは何気なく、上半身は振り付けをこなしていた。両手を真上に平行に差し上げて降ろし、顔の前で手のひらを交差させ、胸の前まで手のひらを降ろしてから左右に広げる――言葉にすればただそれだけの簡単な振り付けが、まるで猿回しのようになることもあれば、まるで音楽そのものになることもある。真理の演じたそれは、音楽そのものだった。映像には音楽は入っていなかったけれど、そのためにかえっていっそう音楽だった。

ダブルルッツ。のどかな速度からターンすると、動作を切らずにそのままアウトエッジに深く乗り、飛ぶという気配もなく踏み切った。本当にエッジが氷を離れたかどうか怪しいくらい低いジャンプで、回転の速さだけが目に残り、ジャンプというよりなにか別の技のように見えた。

真理は、アイススケートの滑り方について何も知らないところから習いはじめて一〇日後に、あの映像を撮影したという。

子供のころ、真理のあの映像の録画を、何度も繰り返して見た。何度も何度も。けれど見るたびに、映像のなかの出来事は、自分から遠ざかっていった。

あんな風になんげなくイーグルに入ること。発表で飛ぶジャンプにルッツを選ぶこと。溜めを作って「よいしょ」と踏み切るのではなく、ターンから一連の動作として流れるように踏み切ること。なにより。表現すること。

どれも、私にはできなかった。フィギュアスケートを習いはじめてから三年が過ぎても、ダブルルッツをまともに着氷することさえ、できなかった。

最後にあの映像を見たのは、フィギュアスケートをやめると決めた日だった。

*

たいていの物事には、いい面と悪い面がある。

今住んでいる家のいいところは、駅とコンビニが近いことと、大学までモノレール一本、乗り換えなしで行けること。悪いところは、スーパーが遠いこと。学校の帰りに食料品を買えない。

だから、いつもいったん家に戻って、自転車で買い物に出る。今日もそうするつもりで帰ってきて、玄関のドアの鍵を開けようとしたら、もう開いていた。きっと、みのりだ。

「ただいま」

「おかえり」

やっぱり、みのりの声だった。

「どうしたの、今日は」

みのりは居間にいた。クッションをありったけ敷いたり抱えたりしながら、仰向けに寝そべってテレビを見ていた。

「暇だから、お姉ちゃんと遊ぼうかなって」

どうせ母に言われて様子を見に来たんじゃないの——と考えるのと同時に、その考えを打ち消す。みのりの不躰なくらい朗々とした声は、私の疑いを鏡のように跳ね返して、私自身を疑わせる。私がいじけた根性で勝手に邪推しているだけかもしれない、と。

みのりは嘘がうまい。演劇をやっていたからではなくて、物心ついたときからうまかった。一七年間一緒に育った私にも、みのりの本心は見通せない。

「これから買い物に行くんだけど——」

「手伝うよ」

二人で歩いてスーパーまで往復するよりも、私ひとりで自転車で往復するほうがずっと早い。だからここで待ってて、と言おうかどうか迷い、結局、

「……じゃ、一緒に行こう」

ここで待ってて、ともし返事したらその声が、邪険に響きそうで、言えなかった。

買い物の支度をしながら私は、

「暇って、受験勉強はどうしたの」

みのりはこの夏に都内の医学部を受験する。

「あー、うん、まあね」

「サボリ？」

「ペース配分って言って」

「順調？」

「そういうの意味ないから気にしてない。調子悪いからって入試を延期してくれるわけじゃないんだし」

「ゴールデンウィークは塾？ ペース配分？」

「ペース配分。みんなでグアムに行こうって。お姉ちゃんは——」

みのりは口ごもって、私の顔色をうかがう。みのりはこういうとき、はっきりと言い切らずに口を濁す。その卑怯さが苛立たしい。まるで私自身の姿を見せられているようで。

「お金出してくれるんなら、行きたい」

「やった」

みのりは右手を掲げて、ハイタッチを誘った。私はそれにつきあって、手と手をぱちんと叩きあわせる。

「それじゃ今日は、衣紅さんと一緒に夕ご飯食べたいな」

「どうして？」

気が緩んで、邪険な返事をしてしまう。みのりも気安く私を馬鹿にして、

「お姉ちゃんってほんと、世間の機微ってものがわかってないんだよね。こういうときには挨拶しとかなないと、衣紅さんが身構えちゃうでしょ」

「身構える、って？」

「お父さんとお母さんがお姉ちゃんのことを家に連れ戻そうとしてるんじゃないか、とか勘ぐらせちゃう、ってこと」

「そんなの衣紅の知ったことじゃないし、そんなの気にするような人じゃないし」

「お姉ちゃんがそう言うなら、そうかもね。でも私は、預かってるの。衣紅さんから、家の鍵」

みのりは意味ありげに間を置いた。

衣紅はみのりに家の鍵を渡している。『いつでも気軽に遊びにきてね』と言って。みのりの言うような意図をこめて衣紅はそうしたのだろうか。わからない。

そこで私も意地悪をした。

「フルシチョフは農場を視察した。『調子はどうだね?』『なにもかもが最高です』『これからもっとよくなるぞ!』。フルシチョフは冗談には冗談で応じた」

「フルシチョフって誰?」

「桑原灯は謎かけには謎かけで応じた」

みのりは携帯を出して、今の謎かけのことを調べはじめた。私に世間の機微がわからないように、みのりには冗談がわからない。

みのりが調べている隙に、街路樹を見上げる。桜並木。まだ咲いたのを見たことはない。ここに引っ越してきて最初の日曜日、衣紅と一緒にスーパーに買い物に行ったとき、衣紅が『これ桜だよ?』と教えてくれた。すると、葉が落ちて枝だけの寒々とした木々が、とたんに満開の桜と二重写しになって見えた。

もうすぐ桜が咲く。週末が見頃になってくれるといいけれど。

*

『ヒューマン・アクティビティの明日を拓く HAパラダイムブログ』

『近くて遠い、遠くて近い、完全人型』

『第六回 ショールームに入るだけでも免許が必要?』

こんにちは、清水衣紅です。HAパラダイムブログ読者の皆様、ゴールデンウィークはいかがお過ごしでしょうか？ わたくしはショールーム巡りに明け暮れ…… と言いたいところですが、家で寝ております。おかげで当ブログの執筆もはかどっている次第でございます。

さて今回のお題は、ショールームに入るまで、です。

完全人型に会うには、

- ・ 使用者を見つけて会わせてもらう
- ・ ショールームに行く
- ・ 開発や運用の仕事をする

の三択です。これ以外の可能性はほとんどゼロです。街角でばったり出くわす？ もし出くわしても、絶対にわかりません。野良猫みたいに家に転がり込んでくる？ 待つだけならタダですが、タダより高いものはありません。

三択のどれもなかなかハードルが高いのですが、お勧めは一応ショールームです。なぜ一応かというと…… 完全人型のショールームは、管理区画なのです。入るだけでも免許が必要な

のです。それもかなり面倒なやつです。

人型免許証の区分の欄に「完全」「副」と書かれていなければ、ショールームに行っても、受付にたどりつく前に文字どおり門前払いされてしまいます。ちなみにわたくしは主使用者で免許を取りましたが、有効期限が短いだけでなにもいいことはありませんでしたので、副使用者でかまいません。

免許センターでビデオを見て筆記試験を受けて、のところは普通の免許と同じです。筆記の科目は人道感情保護法(1)だけなので、他の区分の免許を持っていれば免除されます。実技試験はありません。

大変なのは、fMRI情動検査（いわゆる人格スキャン）があること。これは免許センターでは受けられません。設備のある病院で受けなければならないのですが…… その病院の数が少ない上、どこも予約がいっぱいで、もし休日に受けようとしたら数カ月は待たされます。料金も当然、保険なしの全額自腹です。安いところでも四〇万円はするようです。

完全人型に会ってその魅力を知る前に、これほどのコストを支払うのは、控えめに言っても、勇気がいることだと思います。もし会えるコネや機会があったら、絶対に逃してはいけません！

免許を取ってショールームに入れば、ついにご対面です。どこのショールームも受付は完全人型です。

とはいえ完全人型の魅力はまだよくわかりません。彼女たちは受付をしているだけです。受付としての性能はわかりますが、それだけです。

もちろんショールームは製品やサービスの魅力を訴えるところ。彼女たちの魅力を胸いっぱい味わえる機会がちゃんと用意されています。

次回はいよいよ、彼女たちのお宅を訪問です！

「なにを見てるの？」

「衣紅のブログ」

「へー、書いてるんだ。どんなの？」

「粹としてはビジネスブログ、なのかな。中身は趣味だけど」

みのりに紙を渡すと、私は衣紅に電話をかけた。お休みだからまだ寝ているかな、と思ったけれど、すぐに電話に出た。

「アロハー」

「それはハワイです。こっちはグアムです」

「グーテンモーゲン」

「それはドイツです」

「ここにはカンガルーはいません」

「それはオーストリアです」

「んー、ご機嫌じゃないの。朝っぱらから電話してくるから、なにかと思った」

「ホテルのプールが開くのを待ってるだけです。衣紅もどうせ暇だろうと思って、かけました

。あと、ブログ見ました」

「まだ読んでたんだけ？ 知ってることしか書いてないでしょ」

「書いてあることじゃなくて、書いてないことが面白いです。どうして完全の免許まわりはあんななのか、とか」

fMRI情動検査を課す免許や資格はほかには、ごく一部の自衛官と、大企業の監査役くらいしかない。これほど高価で面倒な検査がなぜ求められるのか。ショールームが管理区画なのはどうか。免許はあんなに面倒なのに、フィールド運用中にコネで会うのなら手ぶらでいいのは、なぜなのか。

「知ってるくせに一。灯ちゃんのいけずー」

「ラッドライトが怖いから、なんて言いませんよね」

人間の領分を侵すのが気に食わない、という理由を掲げて人型を憎み、業務妨害をしたり人型を壊したりする人がいる。HA業界の言葉で『ラッドライト』という。

「それもあるんじゃない？ やばい人にショールームで顔を覚えられて、フィールドで刺されて心肺停止、なんてヤでしょ。刺した相手が人違いだったら最悪だし」

松芝HRの真理の容姿はニュースに映像が流れたけれど、そもそも初期の完全人型はフィールドに出られない。使用者は提供会社の管理区画を訪れるか、自分で管理区画を用意してそこで運用する。

「それもある、って、じゃあ、ほかには？」

「とても口じゃ言えないな。帰ってきたら、体で教えてあげる」

「わりと本気で知りません」

「愛は語るものじゃないし、知るものでもなくて、するもの。続きは帰ってからね」
電話を切られた。私は小さなため息をつく、ホテルのベッドに仰向けに横になる。

「電話切れちゃった？ ご挨拶しようと思ってたんだけど」

みのりの言い訳がましい声に、軽く手を振って返事する。

『知ってるくせに一』と衣紅は言った。よく考えれば、わかることなのかもしれない。

愛。私はたぶん衣紅のことを愛している、と思う。完全人型のこと、気になる、よく知っている、好き、会ってみたい、とは思っている。でも愛してはいない。会ったこともないのに、愛することはできない。

もし会っていたら、愛しているかもしれない。

いつどこでどうやって会えたらいいか、思い描く――

晴れている日は毎朝、私は近所の大きな公園を散歩する。通勤ラッシュが始まる前、まだ街は閑散としているけれど、この公園は賑わっている。犬を連れている人、ジョギングする人、ベンチに座って池を眺める人。

彼女はいつも、広い芝生の上で、大型犬をフリスビーで遊ばせている。

「よーし、へすーす、よーし、よーし」

フリスビーを取ってきた犬を抱きしめて褒めるのを見ていると、私まで褒められたような、照れくさいような気持ちになる。

彼女はいつもそうやって大型犬をフリスビーで遊ばせ、私はいつもその横を黙って通り過ぎていた。

今日は風が強かった。彼女の投げたフリスビーは、突風に煽られて水平を失い、コースを外れて地面に転がり、私の足元近くにやってきた。犬はフリスビーを見失わず、向きを変えて突進してきた。

そのまま犬に任せておいてもよかった。けれど私はフリスビーを拾い上げると、彼女に向かって投げ返した。犬は胴体をバネのように使ってUターンを決め、数歩駆けると、彼女と私の中間地点あたりでジャンプして、空中のフリスビーを口にくわえた。

「ありがとうございます！ よーし、へすーす、よーし、よーし」

私は彼女に歩み寄りながら、声をかけた。

「おはようございます。その子、私が撫でてでも大丈夫ですか？」

「ええ。へすーす、お座り！」

お座りをした大型犬の背中を撫でると、太く硬い毛がくすぐったかった。

「いつも朝はここでフリスビーなさってますよね」

「お嬢様のお姿もよくお見かけします。お散歩ですか？」

やたらに『お』が連発する彼女のセリフにも戸惑ったけれど、

「『お嬢様』？ 私のことですか？」

「ほかになんとお呼びしましょう？ 私は伊藤真理と申します」

「……桑原、灯です」

ここまで思い描いたところで、さっきの衣紅のブログを思い出した。『街角でばったり出くわす？ もし出くわしても、絶対にわかりません。野良猫みたいに家に転がり込んでくる？ 待つだけならタダですが、タダより高いものはありません』。

でも私は、衣紅と街角でばったり出くわして、野良猫みたいに家に転がり込んだ。

*

私の通っている大学は「就職に強い」のが売りで、企業との接触が多い。企業の方がよく授業でしゃべるのはもちろんだし、一年のときから月に一度以上のペースで展示会や工場の見学がある。一年の夏にインターンに行かなかった同級生は、就職課から電話がかかってきて、「なぜ行かないのか」と詰問されたと言っていた。

私は介護には興味がないので、その展示会は気が向かなかった。単位のためでなければ行くどころか、目に入らなかったと思う。市場が大きいだけあってか、展示は大掛かりで手が込んでいたし、要素技術は面白かった。それでもやっぱり、介護は好きになれなかった。この分野に特有の生ぬるいデザインや言葉遣いには、子供だましのような、介護される人を侮っているようなものを感じて、馴染めなかった。

私の専攻は運用監視とは縁遠いので、ほかの展示会なら近寄りもしなかつただろう。けれどその日は、生ぬるいデザインや言葉遣いが見当たらないというだけで、親しみが持てた。

名前を聞いたことのない商社の展示だった。アフリカや中央アジアにある大規模な運用監視センターからサービス枠を買って、日本国内の法人に販売している、とのことだった。

「学生さん？」

妙な生き物、と思った。

黒のスーツとパンプスは、間違いなく営業にふさわしい服装だった。シニヨンにまとめた髪も、アクセサリーのない耳や首元も、化粧っ気を感じさせないナチュラルメイクも。なのにその人は、いかにも営業の人ではなく、営業の人になりすました人だった。人なのかどうかも怪しかった。まるで、もともと別の動物だったのが魔法で人間に変えられて、人間がまだ板についていないような。

「はい」

妙な生き物ぶりに気を取られて、そんな気の利かない返事しかできなかった。

「いやー嬉しいなー。うちの展示、ぜんぜん人が来てくれないの！ 上司がね、『予算が余ってるからなんか考えろ』って言ったから、考えて持っていこうとしたら、『展示会に出展することにしたから展示を作れ』って抜かしやがって、どう考えても無駄遣いでしょって思ったら案の定、閑古鳥に馬鹿受け。

このパネル、けっこういけてるよね？ 私が作ったんじゃないよ、デザイン会社の人。でもデザインで頑張っても、中身がね。運用監視って、お客様にとっては税金みたいなもので、夢がないんだ。でも売るほうはけっこう面白いのよ？ 学校どこ？」

「あの、これは採用活動でしょうか。私は――」

「いって、いって。みなまで言うな。工学部でしょ？ 運用監視のリセールなんて文系のやることだよ。今日は学校の見学で来たんでしょ？ でも介護に興味がないから、うちの展示くらいしか見るものがなかった、でしょ？」

矢継ぎ早に繰り出される推測がどれもおおよそ当たっていることに気圧されながら、

「いえ、展示、見たら面白かったです」

「見たら、ね。ありがとう。興味があるのは業界のどのへん？」

「完全人型です」

なにも彼女が相手だからこう答えたわけではなくて、いつ誰に訊かれても、私はこう答えている。返ってくるのはたいてい、珍しいものを見る眼差しだ。いったいどういう風の吹き回しであんなものに興味を、と。「男性タイプが欲しいんだ？」と訊かれたこともある。

彼女は、目を丸くした。まるで生き別れの妹にでも出くわしたように。

彼女は財布から人型免許証を取り出すと、区分の欄を黙って指で示した。「看補／主」の下に、「完全／主」と書かれていた。

私は声を潜めて尋ねた。

「完全も取り扱ってらっしゃるんですか？」

「これは仕事じゃなくて趣味。私も好きなんだ、完全人型」

彼女も声を潜めていた。声を潜めるのは、明らかに仕事と無関係な話だからでもあり、完全人型の話だからでもある。HA業界では、完全人型の話は大声ではしづらい。

「私ね、二時になったらここ外せるから、そのときちょっと会えないかな？ 電話ちょうだい。これ名刺」

差し出された名刺には、「清水衣紅」という名前が書いてあった。

*

「目を、開けてください」

生身の人間にはとても真似のできそうにない、明瞭すぎる発音のアナウンスを聞いて目を開けると、目の前のモニターが点灯して、「47%終了／残り約1時間45分／次の休憩まで約30分」と表示された。

「次の課題です。ただいまの課題で、思い出していただいた記憶を、鈴木さんに説明してください。この課題の遂行時間は、一〇分間です」

画面が『鈴木さん』に切り替わる。中年男性のアバターで、水彩画風の絵で描かれており、古めかしい白衣を着ている。検査技師という設定だ。

「では、どうぞ」

進行を指示するアナウンスとは違って、『鈴木さん』は人間らしい程度に明瞭な発音でしゃべる。

どう話を始めたらいいか迷っていたら、『鈴木さん』が申し出た。

「別の者に替わりましょうか？」

きっと、中年男性に話して聞かせるには抵抗のありそうな内容だからだ。私が迷ったのはそういう理由ではないけれど、fMRIではそこまでは読み取れない。

もしこの申し出を受けたら、どんなアバターが出てくるんだろう、と一瞬考える。同性愛者風？でもどんな特徴が描かれていれば同性愛者らしく見えるんだろう。納得のいく絵を見せられたらげんなりしそうだし、納得のいかない絵を見せられたら不愉快になりそうだしで、どちらに転んでも面白くない。

「いいです。ちょっと待ってください」

「ええ、ごゆっくり」

さっきの表示によれば、この検査が始まってからもう一時間半を超えた。説明に頭を切り替えようとはするけれど、もともと擦り切れかけていた集中力がさらに弱まって、まわりのことに意識が移る。

私の頭の前後左右をMRIの装置がぐるりと取り囲んで、轟音をあげている。もし専用のヘッドホンをしていなければ、人の声なんかまるで聞こえないだろう。轟音の振動は空気を伝って顔に感じるし、ベッドもかすかに振動している。

fMRI情動検査はその名のとおり、MRIを使って行う。被験者の脳内の酸素消費をMRIで調べながら、さまざまな課題をやらせて、脳のどこがどれくらい働いているかを調べる。被験者の考えていることを感じていることが、fMRIを通じてぼんやりとわかる。ひどい嘘を自覚なしにつく人や、横領や詐欺を悪いと思わない人や、他人の感じている苦痛に共感しない人は、たとえ口ではどんなにうまいことを言っても、この検査に引っかかる、とされている。

さっきの課題は、「大切な人と初めて出会ったときのことを思い出してください」だった。今の課題は、その思い出した記憶を『鈴木さん』に説明すること。

集中力が途切れたのがかえってよかったのか、私の口は回りはじめる。

「去年、大学の見学で、展示会に行ったんです。福祉分野のHAの。私は福祉って興味がなくて――」

『鈴木さん』は私の話を聞いて、あれこれ尋ねたりした。やがて、

「お時間ですので、この課題はここまでです」

と言い、すぐに画面が切り替わって「52%終了／残り約1時間35分／次の休憩まで約20分」と表示された。

「次の課題です。これは、過去の記憶を、思い出していただく課題です。目を、つぶってください。では、友人や、家族や、仕事上の人間関係で、辛かったときのことを、ひとつ、思い出してください。この課題の遂行時間は、五分間です」

*

「私、医者になろうかな」

みのりが言った。

夕食を片付けたあと、誰かがお風呂に入っているあいだ、ほかの家族はたいてい居間に集まってテレビを見る。それが私の実家の習慣だった。いつも一人誰かがいない一家団欒は、互いに互いを試しているような、妙な緊張感があった。

みのりが口火を切ったとき、いない一人は父だった。

『なろうかな』。まるで、さっき思いついたばかりのような口ぶり。けれど、みのりがこういう口を利くときには、もうなにもかもが決まっている。みのりはなにををするにも白々しい。

私は最初から肝心のところを突いた。

「どこの医学部に行くの？」

「東京の国立のどれかかな」

「奨学金、集められるの？」

「お父さんに訊いたら、国立なら学費は出してくれるって」

みのりはまだ、さっき思いついたばかりのようなふりをやめなかった。

「うちって開業医だったっけ」

「向いてないと思う？」

「自費で勤務医になるなんて、お金持ちのボランティアでしょ。鳥取とか青森に行けば？ 東京の国立に受かるレベルなら、奨学金で全部まかなえるって」

「そういう奨学金って、卒業後はその地方に勤めるっていう条件付きなんだけど」

思ったとおり、みのりはもうなにもかも調べ上げて決めていた。

「東京にいたいのか？ どうして？」

「ほかのところに行かなきゃいけない理由がないから」

「みのりが行きたくないんなら、お父さんは行かせたくないでしょうよ。そうやって――」

私が言い終わらないうちに母が、

「行かせたくないのは、私も同じ。灯はどうなの？」

「これってそういう問題？」

「じゃあ、どういう問題？」

息を飲んで、吐き出した。

秋の夜だった。窓を開けていた。虫の声がした。

床を見つめた。寄木張りのフローリング。昔ちょっと流行っていたと聞いた。壁際に並んだ布のソファ。部屋の真ん中に置くと狭苦しいと母は言って、普段は壁際に並べていた。そのソファのひとつに母が座り、ひとつに私が座っていた。みのりはテレビの前のカーペットに仰向けに寝転がり、居間にあるクッションをすべて集めて敷いたり抱えたりしていた。

私はソファの背もたれの上に頭を預けて、天井を見るときも眺めながら、言った。

「東京の勤務医ってめちゃくちゃ忙しいから、お父さんお母さんの面倒はろくに見られないよね。しかも長女は私だし」

反応は聞こえなかった。私は続けた。

「みのりは中学に入るまではフィギュアをやって、中学高校は劇団をやって、それでいくら使ったの。今度は東京の医者？ 学費を投資として考えたら、勤務医になって元が取れるのは早くても五十歳過ぎてからだって聞いたよ」

「じゃ、お姉ちゃんも医者になれば？」

「そういう問題じゃないでしょ」

低く鋭く応じたはずなのに、みのりには蛙の面に水だった。

「求めよ、さらば与えられん」

みのりの劇団仕込みの朗々とした声は、ただの減らず口を、まるで厳粛な真実のように響かせた。

「いいこと言うじゃない」

私はソファから立ち上がり、自分の部屋に戻って、衣紅に電話をかけた。一緒に暮らしたい、と頼んだ。それも、今晚これからすぐに。

みのりが部屋に戻ってくる前に、誰にも気づかれないうちに、私は荷物をまとめて家を出た。

続きは[iOS / Androidアプリ](#)にてお楽しみください。